

山居乱信

1

僕の家は破れ家だが  
窓ガラスは透明にみがいてある  
夕刻から雪がふりはじめた  
「そろそろ電気をつけませうか」  
家の者が聞く  
片手を振って僕は  
「しばらくかうしてゐよう」  
と答へた

2

僕は椅子にもたれて  
机の上のテープレコーダーの方に手を伸ばしてボタンを押した  
しばらくの時間  
「何も音がしないわ」  
「いいんだ」  
夏の夕日 波の音  
風の音をテープは現はしはじめた  
僕は録音した時のことを思ひ浮かべた  
かすかな砂の上の足音  
少しひきずるやうな足音  
それは短かい時間流されてゐたが  
擦過音がして 今度は別の海の波の音  
はげしく砂が吹きつける  
ドドーン ドドーン  
「あの時ずいぶん荒れてゐたのね」  
家の者が言ふ  
「ほら 犬の吠き声も入つてゐるだらう」  
岩石の多い浜だつたので  
波がひく時 水は青く深く沈んだ  
僕はテープを止めた  
窓の外の雪は ずいぶんはげしい  
垂直に落ちるのは夫々が白い糸  
もつれるやうにぶつかつて雪は一本の線  
もし もう少しテープをつづけたら大変だ  
また静かなはじめの海岸の録音が出て来て  
すすり泣く女の声がきこえるのだ

3

僕は椅子にもたれて  
机の上のテープレコーダーの方に手を伸ばしてボタンを押した  
静かな音楽が流れはじめた  
「この曲はいつおいれになりました」  
「いつだったかなあ 相当前だな」  
ふつんと切れてしづかになつた  
急に けたたましい蟬の声が室内になりひびいた  
みーん みーん  
不思議な顔をしてゐる家の者をさげすむやうにして 僕は耳をすました  
僕は一人で砂利道を歩いてゐた 砂利を踏む僕の足音が入つてゐる  
僕が聞くと 僕にはかすかなもつれるやうなもう一つの足音がきこえてくるのだ  
「ずいぶん啼くものね」  
窓の外の雪は ずいぶんはげしい  
垂直に落ちるのは夫々が白い糸  
もつれるやうにぶつかつて雪は一本の線  
あの時の唇の色  
豊かな緑の木立  
室内に満ち満ちてゐる蟬の声  
捲き戻してもう一度きくことにしよう

4

今は 道に立つだけでその家でどのチャンネルを見ているのかがわかるといふ  
僕には僕の破れ家に面した道に誰かが一人立ちつくしてゐるのがわかる  
雪を浴びながら 瞳を凝らしてこちらを見つめてゐることがわかる  
さあ 電気をつけようではないか